

2023年度一般選抜前期 A 日程（1 月 24 日実施）

国 語 問 題

（〈国 1〉ページ～〈国 17〉ページ）

I

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

明治一〇年代から形成され始めた初期の図書館利用者公衆は、階層的には中産知識人層とその子弟たる学生、性的には男性中心の、また距離的にも図書館所在地区の住民を中心とするかなり限定された層からなっていた。

しかしながら、明治三〇年代後半からこの図書館利用者公衆の拡大が始まる。明治三五年頃から全国閲覧者数の爆発的な伸びが観察されるが、この原因としてあげられるのは、まず第一に図書館がすでに設置されている都市部において利用者層がより下層へと拡大したこと、第二に地方において図書館数が急激に増加し、それにとまって地方郡部での利用者数が増大した点である。

まず、都市下層への図書館利用の拡大は端的には商工徒弟・職工層の増加として現われてくる。この現象は明治三〇年代後半から四〇年代にかけて、特に東京をはじめとする大都市部の図書館においてほぼ共通して観察されており、当時の諸新聞も新しい動きとして注目するところとなった。「同館近來の現象として見るべきは職工体商人体の閲覧者増加せし事にして同月中に於ても二〇〇名余來館者ありり」(大橋図書館、明治三八年)、「近來は縞の羽織に前垂掛の番頭連又は小僧をも見受るに至れり」「前だれ掛したり、油くさき股引はいたものを近頃は多く見かけるやうになつた」(帝国図書館、明治三九年)。閲覧統計でも「職工」という職業分類の登場がみられ、例えば帝国図書館の明治三九年八月のある一日間の閲覧統計には八名の職工があげられている。この傾向に拍車を駆けたのが東京市立図書館網の登場であつた。特に深川図書館はその

A

的存在であり、荷上人足船頭車夫、工夫、理髪師等さまざまな職種の人々が仕事のま

ま來館する様子が新聞の注目を浴びている。事実大正期には深川図書館の閲覧者の六、七割は労働者によつて占められるまでになっている。また、日比谷図書館に設置された児童閲覧室も、児童に対する本格的なサービスの開始として非常な歓迎を受け、殺到した児童達で大混雑をきわめるほどであつた。その意味では、東京市立図書館網の登場は、従来からの学生・中産知識人層を主体とする狭い図書館利用者「公衆」から、労働者・都市下層・児童をも包含する、より広範な図書館利用者「大衆」の形成へとという新たな発展段階への起動力となつたといえよう。

他方、日露戦後期に上からの主導で強力に推し進められた地方改良運動の一環としての図書館設立ブームによつて、地方においても図書館数の大幅な伸びがみられた。こうして設立された図書館が内実をとまなわなない形式的なものに墮しやすかつたことはよく指摘される

ことではあるが、しかし、それを割り引くとしても、閲覧者数の増加ペースは一定程度評価されてよいのではなからうか。

あ、こ

明治一〇年代から「公衆」という名で呼ばれ始めた図書館利用者層は、明治四〇年までに延べ数にして年間一〇〇万人規模に達し、明治末年までにその数は三〇〇万人を越えるまでに至っている。ここで、次に問われるべきことは、これら明治期の図書館利用者にとって、図書館での読書体験はどのような意味をもっていたかという問題である。

その持つ意味は、各利用者毎にそれぞれ異なっていることはいうまでもない。高等学校や大学の受験生にとっての図書館と、職工や丁稚小僧にとっての図書館とを同列に論じることはいかない。しかしながら、立場は異なってもどの利用者にもほぼ共通して指摘されるのは、⁽¹⁾ 図書館での読書体験が近代的な読書習慣獲得の訓練を意味していたという点である。

西洋からの輸入制度である明治期の図書館の読書空間は、明治社会のただ中に人為的に創出された「近代読書」のモデル空間であった。その特徴を分析すると、まず第一に、図書館は書物の「多読的」な読書空間であった。明治前期の社会にあつては書物の普及がまだ弱く個人で利用できる書物はさわめて少なかったために、人々は特定の限られた書物を繰り返し熟読する「読書百遍」的精読法が**B**的であつた。これに対し、図書館では冊数制限こそ設けられていたものの、利用者は各自の読書興味に応じてあらゆるジャンルの多様な書物を好きなだけ読むことが可能であつた。内外の古典や漢籍のみならず、日々出版される新作の小説・専門書・参考書・洋書から、さらには新聞雑誌まで古今東西のあらゆる出版物を望むままに読むことができた。山縣悌三郎が東京図書館で「縦に群書を涉猟し」「書籍館で読んだ書物の数は幾百千巻の多きに達した」と書くとき、彼は少数のテキストの読書百遍の世界から、数多くのテキストの多読的読書世界への移行を経験したのである。このような多読的な読み方は、精読的価値観に立つ当時の識者にとっては甚だ不真面目な態度に映つた。

「東京図書館に出入するものにして或るは物理書を繕^{ひもと}き或るは地理書を閲^{けみ}し或るは植物書を見或るは歴史を読み或るは小説を借り或るは心理書を求むるなど僅々四五時の間にして数十部の書を借覧するものありて未だ一定の見識なく慰み半分に図書館に入るか若きもの少なからずとかや」

しかしながら、第二に、図書館は規律によって律せられた読書空間であつた。その典型的な例を帝国図書館にみることができる。まず、厳めしい鉄柵で囲われた帝国図書館の入口は、人々に監獄の入口を連想させた。館内では、閲覧者の守るべき心得として入館年齢・閲覧

券・閲覧冊数・静粛保持等を内容とする閲覧人心得が、閲覧室の壁に張られてその厳守が励行^{れいこう}されていた。

「此館の閲読者に対する掲示の多いには驚く、曰くインキを持て入る事を禁ずる、曰く階段を静に昇降す可し、曰く此辺りで談話をするな、曰くカードの抽出開閉に音をさすな、曰く引出の金具を弄^{もてあそ}ぶ可らず、曰く何、曰く何と全く応接に違^い無い程到る所に雑多の掲示がある」

さらに秩序維持のために任命された監視人・看守が絶えず館内を巡回して、閲読者の挙動を監視していた。明治三八年の帝国図書館の監視状態は次のようであった。

「次に不快に感ずるのは閲覧室はじめ館内隅々隈々を看守が巡覧することである。則ち図書館は図書館の光景でなくて監獄の光景である。則ち図書館の看守人は恰^{あた}も監獄の看守人の如く、閲読者は恰^{あた}も監獄の囚徒の如き関係を持て居るのである」

い、この看守人は書物の盗難や切り取り・書込汚損等好ましからざる行動をとった閲読者を摘発し、掲示板にその氏名を掲げて入館禁止の制裁を科すこともあった。

「X区X町学生X某。館内にて不徳義なる行為をなしたるにつき、向Xヶ月間登館を拒絶す」

ここで目指されているのは、利用者一人一人の身体を通じての「公德」の貫徹、あえて言えば「公共心」の喚起であった。この規律空間内で人々は、居眠りした場合には看守人に呼び起こされながら、公德を守りひたすら読書に励むことを求められた。私生活でのまったく自由な読書から、規律にしたがって **C** 的な読書空間で訓練されることによって、人々は読書の領域における自己規律の習慣を学ぶようになる。

第三に、図書館は「黙読」の支配する空間であった。明治社会は漢文素読的伝統の根強さのために依然として音読的読書慣行が支配的であり、個人で読書する際にも声に出して音読する傾向が強かった。これに対し、図書館の空間は音読が厳しく禁止された完全な黙読が支配する空間であり、その中で読者は **D** 的で美文的な読書ではなく、自己と対話しながら内面的な読書を行なうように促されていた。

第四に、黙読の貫徹の結果として、図書館は「孤独」の空間となった。明治前期の社会においては読書は現在のように個人で読むよりも、**う** 家族や友人間あるいは地域の「共同体」を通じて読まれる傾向が強かった。例えば新聞もひとりで読むよりも家庭内において

読み聞かせを通じて共同体的に享受されることが多かった。これに対し、図書館内では読者は相互に全く無関係の個人であり、孤独の中でひとりで読書していた。明治末の帝国図書館を舞台にした短篇小説中で、主人公の青年は閲覧室で「此室に居ると、具体的に絶対孤独の感がある」と感じている。図書館は共同体から離れてひとりで孤独の中で黙読する空間であった。(①)

第五に、図書館は「平等」の空間であった。閲覧室においては士族・平民の区別はおろか、子供・学生・大人の別なく、人々は一閲覧者として全く平等の立場であった。特別閲覧室にしても、それは少し高めの閲覧料金を出せばより多くの冊数が閲覧できるという程度にすぎなかった。明治三十六年の大橋図書館の見学記事には次のような一節がある。

「あどけない子供の傍には、いかめしき美髯^{びぜん}を蓄へた紳士が居る、短い袴^{はかま}長い袴^{はかま}、蓬髪^{ほうはつ}のうるさ、うなの、カスメチックのハイカラ先生、何れも同じ椅子で同じ机に対して書籍と首ッ引だ」

年齢制限が設けられているケースがあつたとしても、あどけない子供といかめしい紳士とがまったく同じ立場で同じ椅子同じ机で読書している光景は、図書館でのみ見られる光景であつた。

もちろん、以上の諸点にはさまざまな留保がともなうのはいうまでもないが、このように、図書館での読書体験を通じて人々が学んだのは近代的な読書習慣の獲得であつた。すなわち、図書館での読書体験は、利用者を家庭や地域共同体といった音読的共同体的な読書への埋没から解き放ち、規律にしたがつて自らの個性的興味に応じた個人的読書へと進むための訓練となつた。このことは決して一部の利用者にのみ合致することではなく、図書館利用者の大多数を占めた学生にもいえることである。当時の雑誌記事によれば、学生は一回の請求冊数三冊のうち一冊は必ず小説等の文学書を借りる傾向が強かつた。その原因は勉強に疲れた時に小説で息抜きするためであつたという。すなわち、彼等は勉強の合間にそれぞれ好みの小説を読むことを通じて、中央出版資本の受容者層として形成されていくことになる。明治三八年一二月の大橋図書館において最も多く閲覧された図書は小説であり、当時の批評子は

「多数の閲覧者は学生にして、又最も多く読まる、書は小説とすれば、如何に学生が小説熱に浮され居るかを知るに足るべし」と学生の小説熱を嘆いているほどである。(②)

以上のように、明治期の図書館利用者公衆の大多数を占めたのは、中産知識人層とその子弟たる学生層(生徒も含む)であつた。(③)読書史的にみた場合、学生を取り巻く家庭や生活圏はまだ近世以来の共同体的な読書文化の影響が根強く残っていた。明治期の中学校

や高等学校の学寮規則には「黙読時間」という制度が設けられ、黙読の励行が行なわれていたが、学生生徒の通常の読書習慣は依然として音読の方法が支配的であった。しかし、図書館という読書の新しい公的装置で訓練されることを通じて、彼等は家庭や地域共同体の読書文化から引き離され、黙読を基礎とする近代的読書習慣を身につけ、中央活字メディアの受容者層として形成されていった。⁽²⁾

全国各地の無数の図書館の閲覧室で、黙読と孤独と規律の中で同じ参考書、同じ小説、同じ雑誌を読むことによって、彼等は同じ中央活字メディアの読者として一種の仲間意識、連帯感を育んでいく。彼等はその後地域ブロックの学校を経て、さらに一部の者は大都市の上級学校へと進み、卒業後は官界や教育界や実業の世界で中産層を形成していく。読書の世界においても、彼等は全国にわたる中産知識人読者層を形成し、何年かの後には、今度は彼等の子弟が図書館で読書の訓練を始めるようになる。こうして、図書館という読書装置は、中産知識人読者層の世代を越えた再生産装置として機能した。そして、この中産知識人読者が形成途上の読書国民の中核となり、その後大正期以降の大衆的読者層成長を促す先駆けとなった。(4)

東京師範学校に入学後、隣接する東京書籍館で読書三昧の生活を送った山縣悌三郎が次のように述べるとき、彼は図書館の効用を身を以て体験し、図書館での読書によってひとりの読書人へと成長できたことの感謝を、後続する世代の学生達に還元しようとしている。(5)

「書籍館で読んだ書物の数は幾百千巻の多きに達した。フードの大博物書やペルリの日本往訪記などといふ大部の書籍をも、此時皆通読してしまつた。私は図書館に出入する青年諸君に対し深き同情を有つてゐるのは、右に陳べた自分の境遇から起つたのである。故に私が日比谷公園の市立図書館を初め其他各地の図書館へ、これまで毎月少なからざる書籍を寄附し來つたのも、全く右の次第からである」

このように、図書館での読書体験を通じて訓練された利用者公衆は、図書館を離れても活字の世界を自らの力で享受できる自立した読者へと成長し、え、今度は後続する世代を新たな読者として育成していった。近代日本の図書館が生み出してきたのは、このような読書国民の中核となる図書館利用者公衆に他ならなかった。

(出典 永嶺重敏『読書国民』の誕生) なお、問題作成上、一部改変してある。

注 山縣悌三郎 一八五九年～一九四〇年。教育者、社会教育家。明治三一(一八九八)年、東京の自宅に図書館を開設。苦学生に蔵書を無料で貸し出した。

問 1 空欄

あ

え

に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

① なぜなら

② すなわち

③ ところが

④ たとえば

① そして

② だが

③ ようするに

④ もし

① ゆえに

② また

③ つまり

④ むしろ

① しかし

② あるいは

③ さらに

④ きわめて

ア

イ

ウ

エ

問 2 空欄

A

D

に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

① 象徴

② 文化

③ 末端

④ 公共

① 道義

② 限定

③ 融和

④ 支配

① 平均

② 多義

③ 禁欲

④ 恒常

① 吟遊

② 前衛

③ 朗誦

④ 文芸

オ

カ

キ

ク

問 3

本文中、次の一文が省略されている。(①) (⑤) のどこに入れるのが最も適当か、番号をマークしなさい。

このことは、明治期の図書館が中産知識人読者の再生産装置として機能していたことを意味している。

ケ

問 4 ——— 線(1)「図書館での読書体験が近代的な読書習慣獲得の訓練を意味していた」の説明として最も**適当**なものを、次の中から一

つ選び、番号をマークしなさい。

コ

① 図書館では閲覧者としての人々の平等が保たれていたように見えたが、貧富の差は克服できていなかったと気づかされ、近代化への意欲をかき立てられた。

② 「孤独」な空間である図書館で黙読を貫徹した結果、家族・友人・地域などの共同体的な読書習慣のよさが再発見された。

③ 私生活でのまったく自由な読書とは異なり、公共の場である図書館では人々は「公共心」を喚起され、自己規律を身につけていった。

④ 「黙読」が支配的な空間である図書館では、人々は漢文素読的な伝統の後進性を痛感し、西洋的な習俗の摂取に拍車がかかった。

問 5 ——— 線(2)「家庭や地域共同体の読書文化」の説明として、最も**不適当**なものを、次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

サ

① 夕食後には家族のために父親が新聞を音読した。

② 地域の老人や僧侶などが古文書を読み上げた。

③ 子どもを寝つかせる時に、乳母や母親、あるいは兄や姉が絵本を読み聞かせた。

④ 都市部に図書館ができると、商工徒弟・職工層も本を読むようになった。

問 6

本文の内容に合うものを、次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

シ

- ① 図書館での読書体験を通じて人々は近代的な読書習慣を獲得し、学生が勉強の合間に小説を読む傾向は弱まった。
- ② 山縣悌三郎の事例にあるような、後続世代の学生たちを視野に入れた書籍の寄付は、中産知識人層の再生装置としての図書館の機能不全を露呈している。
- ③ 明治期の図書館の利用者公衆は中産知識人層とその子弟が大半を占め、彼らは全国に流通する同じ出版物の受容層となっていた。
- ④ 明治三〇年代後半からの東京をはじめとする都市部の図書館では、商工徒弟・職工にまで利用者層が拡大されたが、児童がそれに含まれるには至らなかった。

Ⅱ

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

差別は、われわれ人間の中の悪意に基づく。だが、だからといってわれわれの心に住まう悪意をことごとく消去すべきなのだろうか？ これまであらゆる宗教家はそう教えてきたし、哲学者の中にもそう説いてきた者が少なくない。

われわれは他人を騙し、貶め、他人に危害を加え、破滅させる。純粹に（さまざまな意味で）気に入らない他人に禍をもたらそうと企む場合もある。正義を全うするため、国家や家族を守るため、などの美名のもとにそうする場合もある。復讐の場合もあり、自分の身や地位を守る場合もある。

外形的に他人に危害を加える行為のうち、動機によって正しい行為と誤った行為とを区別することは有効ではないであろう。理念的には分けられるであろうが、**A**には外形的に他人に危害を加える行為の内的動機を抉り出すことは虚しいであろう。当人にも不明な要因が残るであろう。ありとあらゆる動機によって、われわれは他人に危害を加える存在者なのだ。他人を苦しめようとし、その苦しみを喜び、他人を破滅させようとし、その破滅を祝う存在者なのである。

フロイトは『文化における不安』において、こうした「攻撃衝動」をエロスと並ぶ人間存在の自然本性とみなした。子供は攻撃するところが禁じられている権威（例えば父親）を「同一化」を経て自己の中に取り入れることによって、困難な状況から脱する。そして、ここに「罪責感」が生まれるのである。よって、人間は攻撃衝動を抑える代わりに、生涯を通じて罪責感と闘い続ける。「文化」は、自他を攻撃し破壊し、他人を排除し抹殺し、他人に嘘をつき騙したばかり利用するところに、ある集団を尊敬し別の集団を軽蔑するところに成立するのである。

この線上に動物行動学者のK・ローレンツや、精神病理学者のA・ストーが位置する。ローレンツは、人間のみが文化を有するが、それを人間のみが「種内攻撃」をするところに求める。地上の動物が「高級」になればなるほど、集団や個体の差異に敏感になり、ある集団や個体を好み、別の集団や個体を嫌うのである。ある集団や個体は味方であり、ある集団や個体は敵なのだ。こうした濃淡のある差異の体系が形成されるところに文化は芽生え生育するのである。言い換えれば、いかなる敵も存在しないところには、いかなる味方も存在しないのだから、一致団結して敵に立ち向かい味方を守るという勇敢な行為、集団のために自分を犠牲にするという感動的な行為も消え

去る。友情も恋愛も家族愛も……それを妬み破壊しようとする敵がいてこそ大切な絆なのである。

あ、これを無批判的に排

除し否定するのもやはり危険なのだ。差別感情というテーマにおいて、われわれのうちに否定しようもなく認められるこうした広い意味での攻撃＝悪意を一掃することを目標にしてはならない、とは言えるであろう。

あらゆる悪意とその発露が根絶された理想社会を掲げて現状を嘆くのではなく、自他の心に住まう悪意と闘い続けること、その暴走を許さずそれをしっかり制御すること、こうした努力のうちにこそ生きる価値を見つかるべきなのだ。人間の悪意を一律に抹殺することを目標にしてはならない。誤解を恐れずに言えば、**B**こそ人生の豊かさがある。それをいかに対処するかがその人の価値を決めるのである。

自分のうちに潜む攻撃心を圧殺してはならないということは、それを容認することではなく、ましてそれをそのまま肯定することではない。われわれは、むしろ差別感情に伴う攻撃心や悪意を保持したまま、自己を正当化することが多い。ここに、剥き出しの攻撃心や悪意よりはるかに悪質な、巧妙に隠された攻撃心が育っていく。ここには、差別をしていないと言いながら紛れもない差別をしているという狡さが悪臭を放っている。

人間はさまざまな場面で狡いが、差別問題はこれが露出する場面である。そのうち最たるものは、「区別があるのであって差別はない」という主張であろう。(1)

性差別に関して中河伸俊は、(もって回った言い方だが)次のように語っている。

そして、少なくとも「先進産業社会」では、現実の不平等や支配の制度的な根強さとは対照的に、理念のレベルではその要求をめぐる勝負はついているといいだろう。これは、い、近代の物差しをあてて女性／男性関係を測るかぎり、多くの男性は、経済財や地位、権力へのアクセスに有利な制度的アレンジメントにもたれかかっているという意味で、好むと好まざるとにかかわらず自分が「足を踏んでいる」側にいると認めざるをえないことである。(渡辺恒夫編『男性学の挑戦』新曜社)

ある区別Dにおいて、現に得をしている、側の者は、Dがただの区別であることを——たとえそう確信しても——認めてはならない、という提案である。既存の区別によって結果として利益を得ている者は、負い目をもたねばならない、無理にでもうしろめたい思いをしななければならない、という提案である。たまたま障害者に生まれなかったことを「感謝する」のではなく、障害者に対して負い目を抱く態度が必要だということ、たまたま美人に生まれたことに、たまたま秀才に生まれたことに感謝するのではなく、それを正真正銘の負い目として捉えねばならないことである。(②)

あらゆる提案と同じく、その根拠は確固としたものではない。最終的には原理原則、例えば「人間は平等だから」という抽象的原理に基づくのではない。**う**、何度考えても全身で「そう感じられる」というところに行き着く。

さまざまな分野で成功している人がいる。その「原因」を尋ねれば、知的・肉体的に恵まれた資質、恵まれた環境、あるいはさまざまな**C** 出会いであることを否定することはできない。たとえ、その相当部分が当人の慧眼や努力に帰するとしても、そうした能力そのものに遺伝形質が参与しているかもしれないのであるから。(③)

その場合、——ここを強調したい——当人が謙虚であるだけでは、このことが提起する問題（人生の理不尽そのものである問題）の解決にはならない。優れた資質をもつ者、**え** 賞賛すべき業績を上げた人が謙虚であることほど簡単なことはない。彼（女）はすでに多くの人々によって賛美されているのであるから、そのうえ傲慢になる必要がないのである。こうした人々が謙虚であることは、（いわゆる）劣った形質をもつ者、仕事の上で失敗した者、人生において幸運から見放された者が、卑屈にならず、自殺せず、犯罪に走らずに生き抜くことに比べて無限に容易である。(④)

だから、優れた資質をもつ者や仕事上の成功者は、——謙虚になるのはもちろんのこと——そういう「星のもと」に生まれてこなかった膨大な数の人々に対して、とりわけ劣悪な資質のもとに生まれた人々や不運にあえぐ人々に対して負い目をもたねばならない。(⑤) もちろん、それが最終的解決にはならない。最終的解決はないかもしれない。だからこそ、その感情から眼を逸らすのではなく、そこに視点を固定して無理にでも自分のうちにうごめくさまざまな感情を捉えなおしてみること、こうした態度からこそ差別問題解決の糸口が見えてくるように思われる。

こうした態度は、「自然である」という言葉を

D

・非反省的に使用する態度からの決別と言いなおしてもよい。フッサールの言葉

を使えば、各人が自然的態度から「現象学的還元」を遂行して、そこに開かれる新たな世界を見渡すことがここに要求されている。なぜなら、差別問題において「これは、差別ではなく区別だ」と言い張る人は、「自然である」という言葉を **D** ・非反省的に使いたくてもうずうずしているからである。それは男として自然だ、女として不自然だ、中学生として自然だ、日本人として不自然だ……というように。彼はこうした反省を加えない「自然である」という言葉に行き着くことによって、すべての議論を終らせようとする怠惰な「自然主義者」なのである。

彼は、そこに潜む問題をあらためて見なおすことを拒否し、思考を停止させる人である。「結婚するのはあたりまえ、女が子供を産むのは自然」という結論をいつも手にしており、その鈍い刀ですべてをなぎ倒すのだ。

ある人が、差別におけるコンテキストにおいて「あたりまえ」「当然」「自然」という言葉を使用したら用心しなければならない。差別感情の考察において、「子供が学校に行くのはあたりまえ、大人の男が働くのは当然」と真顔で語る人こそ、差別問題を真剣に考えている人にとって最も手ごわい敵である。なぜなら、彼らはまったく自らの脳髓で思考しないで、ただ世間を支配する空気に合わせてマイノリティー（少数派）を裁いているのだから。しかも、そのことに気づかず、気づこうとしないのだから。

（出典 中島義道『差別感情の哲学』講談社 なお、問題作成上、一部省略してある。）

問1 空欄 **あ** **え** に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|---|-----------|----------|----------|-------------|
| あ | ① また | ② ところで | ③ しかし | ④ やむをえず |
| い | ① ときには | ② しいて言えば | ③ いいかえれば | ④ ひるがえってみれば |
| う | ① そうではなくて | ② また | ③ けれども | ④ 折に触れて |
| え | ① あるいは | ② ちなみに | ③ ようするに | ④ むしろ |

エ	ウ	イ	ア
---	---	---	---

問 2 空欄 A へ D へ に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|---|----------|----------|----------|----------|
| A | ① 懐疑的 | ② 現実的 | ③ 倫理的 | ④ 理想的 |
| B | ① 悪意のうちに | ② 善意のうちに | ③ 努力のうちに | ④ 敵意のうちに |
| C | ① 意図的 | ② 刺激的 | ③ 偶然的 | ④ 感動的 |
| D | ① 因習的 | ② 自覚的 | ③ 可逆的 | ④ 作為的 |

オ
カ
キ
ク

問 3 本文中、次の一文が省略されている。(①) へ (⑤) のどこに入れるのが最も適当か、番号をマークしなさい。

これは、必ず差別をしている者の側から発せられる。

ケ

問 4 線「こうした努力」とあるが、どのような努力か。最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- ① 自らや、他者の心の中で生まれる攻撃心を押し止めようとする努力。
- ② 人間の文化的生活を保障している集団を否定し、一掃しようとする努力。
- ③ 別の集団を軽蔑することで生まれる不可避的な罪責感と闘い続ける努力。
- ④ あらゆる悪意とその発露が根絶できない社会を認め続ける努力。

コ

問 5

本文の内容に合うものを、次の中から二つ選び、番号をマークしなさい。ただし、解答の順序は問わない。

シ

サ

- ① 善と悪の行為は倫理的に区別されるため、動機次第では他者の破滅に対して祝福してもよい場合がある。
- ② 「文化」は他者を攻撃することによって成立するというフロイトの説に対して、ローレンツやストーも同様の考えを示している。
- ③ 中河伸俊によれば、すでにある区別において利がある側はみな、それを差別と認識し、否応なく負い目を感じる必然性に至る。
- ④ 差別において得をしている側が常に負い目を感じることによって、差別問題を解くきっかけが見えてくる。
- ⑤ フッサールは「現象学的還元」を提案したが、一方で彼は差別問題においては思考を停止するような怠惰な態度の持ち主である。
- ⑥ 差別問題に関する考察に際して注意すべき人物を明らかにしたければ、その人が悪意を持って「あたりまえ」「当然」「自然」という言葉を用いているかどうかを調べればよい。

Ⅲ

次の1～5の説明に当てはまるものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

1 二葉亭四迷の作品。

① 『当世書生気質』

② 『平凡』

③ 『普請中』

④ 『十三夜』

2 文学史上、自然主義に属すると言われる作家。

① 徳富蘇峰

② 徳田秋声

③ 山田美妙

④ 里見弴

3 有島武郎の作品。

① 『女坂』

② 『女生徒』

③ 『或る女』

④ 『女の一生』

4 徳永直の作品。

① 『太陽のない街』

② 『梨の花』

③ 『蟹工船』

④ 『セメント樽の中の手紙』

5 文学史上、第三の新人に属すると言われる作家。

① 村上春樹

② 吉行淳之介

③ 大江健三郎

④ 久米正雄

オ

エ

ウ

イ

ア

IV

次の空欄

ア

オ

に入れるのに最も適当なものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

1

①～④の文の傍線部の中で、正しい表現は「ア」である。

① 就職内定の吉報が届いて、彼女は色を失って大喜びした。

② 細かな気配りができる彼は、懐が深い。

③ 大きな取り引きが決まったのに、流れにさおさすように材料入荷の遅れの連絡が入った。

④ 自分の気に入らないことがあると、彼はすぐにつむじを曲げて黙り込む。

2

①～④の文の傍線部の中で、正しい漢字で書かれているものは「イ」である。

① 事故の遺族に保障金が支払われた。

② 交通安全の評語コンクールに入選する。

③ 一時的に報道管制を敷く。

④ 中学校の音楽観賞会のために演奏する。

3

見かけばかりりっぱで内容がともなわないことを「ウ」と言う。

① 鶏口牛後

② 竜頭蛇尾

③ 羊頭狗肉

④ 才子佳人

4

「鉄面皮」とは「エ」という意味である。

① 恥知らずな態度をとること

② 人に冷たく接すること

③ 表情をあまり変えないこと

④ 常に冷静沈着であること

5

①～④の中で、正しい敬語の表現は「オ」である。

① その件につきましては、案内係に伺って下さい。

② 先ほど、山田先生が参られました。

③ その方のお名前は存じ上げません。

④ 先生は僕が留学中に撮った写真を拝見された。